

少雨及び高温に伴う農畜産物等の技術対策について

令和7年8月1日

農業イノベーション推進室 技術普及・高度化支援班

令和7年7月25日に気象庁より「長期間の高温に関する九州北部地方（山口県を含む）気象情報 第2号」が発表されました。

長崎県では、6月中旬から気温がかなり高い日が多く、記録的な高温となっている所もあります。また、少雨の状況も続いている上、気温の高い状態は、今後も更に1か月程度は続く見込みです。

つきましては、今後の気象情報に十分注意し、被害を回避するため農畜産物等の適正な管理及び用水の効率的利用等、干ばつ及び高温に向け、下記対策の徹底をお願いします。

記

【共通】

熱中症対策として、高温下での長時間作業を避け、こまめな水分、塩分の補給と休憩を取るよう心掛けること。

特に、高齢者は、のどの渇きや暑さを感じにくい傾向があり、熱中症にかかりやすいことから十分注意すること。

1. 水稻

【共通事項】

(1) 節水対策

- ① 間断灌水や飽水管理、走水灌水の節水管理に努める。
- ② 常時、貯水量を把握し、用水の絶対量が不足した場合は受益者の話し合いにより計画的配水に努める。（すべての水田に同時配水でなく、区域を決め順々に配水する）
- ③ ほ場の漏水対策を徹底する。最低必要量の走水により亀裂の発生を防ぎ、亀裂を生じた場合は田面を軽く削って亀裂を埋めるか、降雨や水が入り次第に軽く中耕して亀裂を埋める。特に畦畔の漏水防止を徹底し、付近の青草を刈って敷く。

(2) 用水確保対策

- ① 地下水を利用できる場合はボーリング水や井戸水を確保する。
- ② 河川水の利用に向け、ポンプの台数や設置場所を確保する。
- ③ 還元灌漑（排水の循環利用）を工夫する。

【早期水稻】

- (1) 出穂期以降は高温になると稲体の消耗が早まり、穂への澱粉蓄積速度のバランス

が崩れ、不稔、充実不足、白未熟粒の発生等、収量、品質に影響を与える。
このため、用水の確保ができる水田では、掛け流し灌水などによる地温や水温の低下対策を講じる。

- (2) 用水が不足する水田では、登熟期間は田面が乾かないよう間断灌水や飽水管理、走水灌水の節水管理に努める。

【普通期水稻】

- (1) 中干しを実施している圃場は、強い中干しは田面の亀裂が大きくなり、その後の湛水が困難になる恐れがあるので注意する。また、節水管理には田面の溝切りが有効なため、中干し開始時に作溝する。
- (2) 水稻の出穂前後の時期は生育期間で最も水を必要とする時期であるため、この時期は湛水または湿潤状態を保つようにする。また、高温に伴い稲体が消耗し、登熟後半に肥料切れとならないよう、幼穂等の観察に努め、穂肥の施用時期や施用量の適正化に努める。
- (3) 出穂期以降の管理は早期水稻に準じる。
- (4) 高温・乾燥条件下では、コブノメイガ等の食葉害虫やウンカ類では増殖速度が速まり世代交代が促進され大発生となりやすくなることや、高温により、紋枯病及び穂吸汁性カメムシ類の多発生が懸念される。このため、発生状況を見極め、適期防除に心がける。

2. 大豆

- (1) 高温条件下では出葉速度が速まる等生育が促進されるので、土入れ等の管理時期を失ないように努める。
- (2) 高温・乾燥条件下では、ハスモンヨトウ等の食葉性害虫の発生や活動が活発になるのでフェロモントラップや圃場観察により発生に留意し、適期防除に努める。
- (3) 開花期には多くの水分を必要とするので、葉が裏返るなど乾燥した圃場で用水が確保できる場合はうね間灌水を実施する。

3. 野菜

【共通】

- (1) かん水は、時間帯に注意し、特に高温が予報される日は早朝・夕方に実施する。
- (2) 地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、適宜、地温抑制マルチや敷わら等を活用する。かん水施設がある圃場は、積極的にかん水を行う。
- (3) 園芸用ハウスでは、妻面・側面または天窓を開放するとともに、遮光資材等を使

用し、ハウス内の温度上昇を抑制する。さらに、換気扇や細霧冷房などにより、適切な温湿度管理に努める。

- (4) 施肥（追肥）は固形肥料では吸収されにくいので、液肥を薄く施す。
- (5) 薬剤散布は、朝夕の涼しい時間帯に行う。高温乾燥条件下では薬剤散布による薬害が発生しやすくなるので、作業は朝夕の涼しい時間帯に行う。高温乾燥条件が続くとハダニ類、アザミウマ類が発生しやすいので、初期防除に努める。土壌消毒等の実施にあたっては、高温条件に伴う急激な気化による作業者及び周辺への影響が懸念されるため、防護マスクや被覆処理等の安全対策を確実に講じる。
- (6) 秋冬野菜のは種・定植は、出来るだけかん水が可能な圃場を選定し行う。は種・定植後に乾燥が続く場合は、株元中心への定期的に灌水を行うとともに、補植用の苗を準備しておく。

【いちご】

- (1) ポット育苗中の苗は、寒冷紗等の高張りにより葉焼けを防止するとともに、午前中の温度の低い時間帯に丁寧に十分量かん水する。極度に乾燥する場合は、たんそ病等の発生に留意しながら、午後に少量のかん水を行う。曇天から晴天への急激な天候の変化があると水不足によりしおれることがあるので、天候が急変しそうな時はかん水管理には注意する。
- (2) かん水が少ないと、苗の充実不足となるので育苗ポット内に確実にかん水を行う（手かん水、点滴かん水等）。
- (3) ハダニの発生に注意し、適期防除に努める。

【アスパラガス】

- (1) 午前中から土壌水分の減少が多くなるため、午前中から十分なかん水を適宜行うようにする。株元に堆肥が不足している圃場は、乾燥防止のため堆肥を施用する。
- (2) 適度な整枝を行い、ハウスの妻面、サイド、谷部を極力開放し、風通しを良くして高温対策に努める。
- (3) 寒冷紗被覆等により高温対策を行う。
- (4) アザミウマ類、ヨトウムシ類等の害虫防除に努める。

【夏秋果菜類】

- (1) できるだけ厚めの敷わら等で乾燥防止対策を行うとともに、可能な所はかん水を

行う。

4. 果樹

【共通事項】

- (1) 水源の確保に努め、極力かん水して干害を防ぐ。特に幼木はこまめなかん水を行う。ただし、みかんは品質向上のため、土壌の乾燥状態や生育に応じてかん水する。
- (2) 敷わら、敷草を行い、土壌水分の蒸発防止に努める。刈り取った草は樹冠下に敷く。
- (3) 干害の程度に応じて摘果（摘房）等を行い、樹体への負担軽減を図る。
- (4) 薬剤散布は、早朝の涼しい時間帯に行う。高温乾燥条件が続くとハダニ、サビダニ等が発生しやすいので、適期防除に努める。

【みかん】

- (1) シートマルチ栽培で被覆した園では、早朝に葉の巻き具合や葉色の変化など樹勢の状況を見て、かん水するかどうかを判断する。また、かん水チューブ等によるドリップかん水等により、地表面に直接かん水する。
- (2) 日焼け果発生軽減のため、炭酸カルシウム水和剤等の散布を行う。
- (3) ハウスみかんでは寒冷紗の被覆を行ない、ハウス内の温度を下げるとともに日焼け果の発生を抑える。現在、収穫中のハウスみかんは、早朝の涼しい時間帯に収穫し、収穫後は果実の鮮度保持に努める。
- (4) 袋かけを行なうかんきつは、早めに実施する。

【びわ】

- (1) 極端な土壌乾燥は、花芽分化が促進され着房過多となり、樹勢の低下を助長するため、充分なかん水を行った後に敷きわら、敷き草を行う。
- (2) ハウスびわでは寒冷紗の被覆を行ない、ハウス内の温度を下げて花芽分化を促進させ、開花の遅れを防ぐ。

【なし】

- (1) 高温等により熟期が早まる可能性があるので適期に収穫を行う。また収穫は気温が低い早朝に行う。
- (2) 中晩生品種は高温と土壌の過乾燥が続くとヤケ果や水ナシ果になりやすいの

で、充分なかん水を行った後に敷草、敷わらを行う。

【ブドウ】

- (1) 土壌の極端な乾燥後の多量の降雨は、裂果の発生を助長するため、過度な乾燥状態とならないように、こまめなかん水により土壌水分を保つ。
- (2) 高温等により果実の減酸が早く着色が遅れるため、果実品質を確認し適期に収穫する。

5. 茶

- (1) 茶園の外周およびうね間の土壌管理として、敷わらや敷草等を行い、地表面からの水分蒸散を防ぐ。
- (2) 茶園の周囲の障害物を取り除き、風通しを良くする。
- (3) 茶樹の株元から株内への頻繁なかん水に努める。かん水は朝夕の涼しい時間帯に行う。
- (4) かん水後には、野草・カヤ等で株元付近をマルチする。
- (5) 既に落葉等の被害を生じ始めた茶園では、かん水時に肥料を溶いて、液肥として株元に施用する。ただし、多肥になると根の活性を弱めるので注意する。
- (6) 深耕・裾刈り作業を中止する。
- (7) カンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ等の害虫発生に注意し、適期防除に努める。薬剤散布は、早朝の涼しい時間帯に行う。

6. 花き

- (1) ハウス内が著しく高温になる場合は、可能な限り妻面、側面、谷部を極力開放し、風通しを良くする。また遮光資材被覆や循環扇、外気導入の利用等により降温対策を行う。
- (2) ハダニ類、アブラムシ類及びうどんこ病など、干ばつ・高温時に発生が多くなる傾向の病害虫については、その発生動向に十分注意して適期防除に努める。
- (3) 薬剤散布は、朝夕の涼しい時間帯に行う。
- (4) 輪ぎく類において、高温に由来する奇形花や開花遅延の恐れがある場合は、消灯と同時に夜間冷房を行う。
- (5) 露地栽培の小ギクについては、夕方などの涼しい時間帯にかん水する。また、マルチ栽培を実施していない圃場は敷わら・敷草を行い、土壌水分の蒸散防止に努

める。特に、これから花芽分化期を迎える作型については、高温・乾燥による早期発蕾や草丈伸長抑制のため、これらの対策を徹底して実施する。

- (6) カーネーション等定植後の苗が枯れた場合は、補植苗を移植する。
- (7) これから定植等が始まる品目については、土壌の保水力を高め、根を深く張らせるために、深耕や有機物の投入等を実施するとともに、用水の確保に努める。

7. 畜産

【飼料作物】

- (1) 干ばつの被害で正常な生育が期待できない場合は、早目に刈り取り、乾草、サイレージとして、貯蔵して利用する。ただし、ソルガムが草丈1 m未満の場合は、給与しない。
- (2) 幼植物の時期に干ばつ状態がつづく時は、かん水を必要とするが、一度行くと、中断により枯死する事があるため、生育が安定するまで、かん水を継続する。
- (3) 干ばつ状態が続くと、アワヨトウ、アブラムシ等の害虫が異常発生することがあるので、早期発見と防除に努める。食害被害の進捗が著しい場合は、早急に刈り取り作物被害の軽減を図る。
- (4) ソルガムの遅播き等で今後の生育が期待できない場合は、再播種を行うか、初秋にいもち病抵抗性のあるイタリアン品種を作付ける。
- (5) 放牧地等草地については、過放牧、過度の低刈りや短い間隔での刈り取りを避け、貯蔵養分の消耗を軽減して草勢の維持に努める。

【家畜】

- (1) 飼養密度の緩和や、畜体等への散水・散霧により、家畜の体感温度の低下を図るとともに、寒冷紗やよしず、屋根裏への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布、送風機や換気扇の増設（増設の際、過電流とならないように留意）等により畜舎環境の改善を図る。
- (2) 良質で消化率の高い飼料の給与、ビタミンやミネラルの追給及び清浄で冷たい水の給与に努める。
- (3) 観察の頻度を増加させることにより、健康悪化の兆候がないか等、家畜の健康状態をよく把握し快適性に配慮した飼養管理に努める。